

「彼の人の貴婦人に寄す嘆きの唄」(訳)

柴田竹夫

I

生きとし生けるものが、生まれながらに、

束の間の休息を取る、さもなければ、

命を長らえることができない、その様な長い夜

我が悲しみの心に次の様な思いが毎夜の様に湧き上がる、

私を慰めるものは死のみ、

この身をなんと卑しめていることか、

なんと一切の幸福を奪われていることか。

この思いは朝まで続く、そして

朝から夕べまでついてまわる。

苦しみを借りるのに心配は無用、

十分な時間と許しを得ているから。

十分に泣き、存分に嘆き悲しむ苦しみを和らげてくれる者はおらず。

苦しみの激しい火花で今やこの身の破滅。

## II

愛の神は、我が望みが決して適えられることのないこの様な所に私を追いやった。

憐れみも慈悲も寛容も見られず。

だが命を失おうとも、この苦しみの心から愛を引き離すことはできず。

愛すれば愛する程あの人を私を苦しめる。

私にはわかる、治療の術もなく

死からはどうしても逃れられないことが。

## III

あの人には実際に何と呼ばれているか。

あの人の名は、女らしい寛大さ、

若々しい真面目さ、控え目な美、

そして自制心と不安を伴なう快活さ。

その姓は、無慈悲な美人、

幸福と結ばれた賢者<sup>※</sup>。

愛するが故にあの人は罪もない私を殺そうとする。

私はあの人を一番愛する、

命ある限りこの身の千倍も

全世界の富や命あるものよりも愛する。

愛の神は私が愛の関わりを持たざる所に

注意深く私を置かなかったのか？

ああ、まさにその様に運命の輪は回り、

愛の神の炎の矢で私は息絶える。

私は我が甘い敵だけを最も愛しうる。

常にあの人に仕え、悲しい目を見ようとも心変りしないことの他は

愛の神は彼の術について何も教えてはくれず。

#### IV

我が心配に満ちた真実の心の中は

悲しみに溢れ、喜びは見えず、

生まれてこのかた悲しみがついてまわる。

望みのものはことごとく見つけられず、

すぐにも手に入れられるものは

欲しいと思わず。

こうしたことを誰に嘆いてよいものかわからない。

あの人はこの様な所から私を連れ出すことができるのに  
私が泣こうがわめこうが気にもとめられない。

あの人は私の苦しみに憐れみを掛けようとはなさらない。

ああ、眠るべき時も私は目覚め、

踊るべき時も恐れから身を震わす。

あなたは決して注意を払ってくれないけれど、

この耐え難い生活をあなたのために送る。

我が心の貴婦人、我が命の女王よ、

感じたままをあえて申し上げます、

あなたの優しい鋼の心は私に対し

鋭く研ぎすまされております。

我が愛しい心、最愛の敵よ、

なぜこの様な苦しみを与えられるのか、

一体あなたを悲しませるどんなことを私は語りまた行なったというのか、

あなたに仕えあなたを愛しているだけではありませぬか？

命ある限り私はその様にいたしましょう。

それゆえ優しい人よ、腹を立てないで下さい。

あなたはとても善良で美しい方、

あなたが善悪様々な従僕を

置かれないならば、それはまさに驚き。

だが私は従僕のなかで最もつまらぬ男。

我が優しく正しい人よ、それでもやはり

気高いあなたにお仕えするに、どうしても

未熟で相応しくないこの身なれど、

誓って申し上げます、あなたを楽しませたり、

あなたの苦しみと知った何であれ、それを癒すのに、

私ほど真剣なものは他にはおりますまい。

もし我が意志に釣り合う確かな力があれば、

これが本当か否かわかっていただけでしょう。

あなたの心の望みを真剣に適えようとする者は、

この世では私をおいて他にはおりますまい。

あなたを愛し、ひどく恐れてもいます。

いかなる場合もそうでなければならず、ずっとそうでありましたが、あなた以上に愛した人はおらず、これからもおりませぬ。

私はただあなたにお願いしたいのです。

私を信じて下さい、立腹なさないで下さい。

これからも仕えさせて下さい、それがすべてなのです。

あなたに愛されることを望むほど

私は向う見ずでも無分別でもありません。

私にはよくわかっております、ああ、その様なことはありえぬことと。

私はまことに取るに足りぬ男、あなたはすぐれた方故に。

あなたはこの世で最も立派な御方、

だが私は何ら得ることもない男。

そうではあれど、あなたは心得えておられます。

どの様な苦痛を感じようと渾身の力をふりしぼって、

常に誠実に仕える気がないことを理由に、

あなたへの奉仕から私をはずされたりはしないことを。

あなたに対する私の立場はその様なもの。

憐れみを掛けては下さらないが、

私の死のことはお許しいたしましょう。

もしも私以上に誠実な従僕を見つけられなかったその時は、私がこの様に息絶えるのを黙って見ておられるおつもりですか？  
良き望み以外のいかなる罪のためでもなく。

その時は不実は誠実と並んで立派なことになりました。

私は自分の生死をあなたにお預けし、

正しい従順な心で祈ります。

私をあなたの一番の喜びとして下さい。

いついかなる時もあなたの感情を害するようなことを

思ったり、口にするくらいならば、

あなたを喜ばせ、そして息絶える方が増しです。

優しい人よ、私の痛ましい苦しみに憐れみを掛けて下さい。

あなたの恵みの滴の数滴でも掛けて下さい。

さもなければ、私にはどの様な幸福も希望も長らえず、

不断の苦しみに満ちた我が心の中に住まうこともない。

あなたを愛さなければならず、

どの男に劣らず常に真実でなければなりません。

だが美しく気高いあなたを愛すれば愛する程

私から離れていかれることは承知しております。

ああ、いつになればその様な残酷な心が変わるのでしょうか？

あなたの女らしい憐れみ、気高さ、

優しさは今はいずこにあるのか？

あなたは私のために何も費やすおつもりはないのですか？

これ程に私は優しいあなたの従僕であり、

これ程大きな望みを抱いてあなたにお仕えせねばならないが、

もしこの様に私が死ぬとしても、

あなたが手にされるものは何一つありません。

記憶の限りでは、あなたの残酷さのもとになるようなことは私は何もしておりません。

次のことを心からお願いたします。

あなたが生きておられる間

もしも私よりも誠実な従僕を見つけれられたならば、

その時は私を捨ててすぐ様息の根を止めて下さい。



〈作品 Geoffrey Chaucer (a. 1340-1400), "A Complaint to his  
Lady" (1374, or soon after)〉  
〈テキスト F. N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer*,  
2nd ed. (Oxford: Oxford U. P., 1957)〉

注

28行 これら姓名は、男が恋する貴婦人の属性である。

この詩の成立は、一三七四年かその直後と考えられている。直接の原典は不明である。形の上では第一部は、*rhyme royal* (a b a b b c cと押韻して各行十音節を含む七行からなる詩形)、第二、三部は、*terza rima* (三行連句の*iambic*体で、a b a' b c b' c d c'、…のように押韻する、だがここでは不完全)、そして第四部は、十行連 (a a b a a b c d d cと押韻、だがここでは不完全) から成る。この詩の特徴は、韻律の実験詩であることである。この詩は、Dante Alighieri (1265-1321) の *La Divina Commedia* (『神曲』) (a. 1307-1321) に使われる *terza rima* を用いた英詩上最も初期の例であり、チヨーサーに対するイタリアの影響がここにも如実に見られる。ちなみにチヨーサーの初めてのイタリア旅行は一三七二―三年のことである。更にこの詩の十行連も英詩上最も初期の例である。

この詩には三つの異なる詩形が同時に使われているが、一つの主題の下での統一が見られる。すなわち宮廷愛の伝統に則る報われることはないが真実である愛についてうたわれている。